



第213号

発行所 一般社団法人 芝蘭会 京都大学医学部同窓会 〒606-8315 京都市左京区吉田近衛町 TEL 075-751-2713 FAX 075-752-4015 E-mail: info@shirankai.or.jp http://www.shirankai.or.jp

主な内容

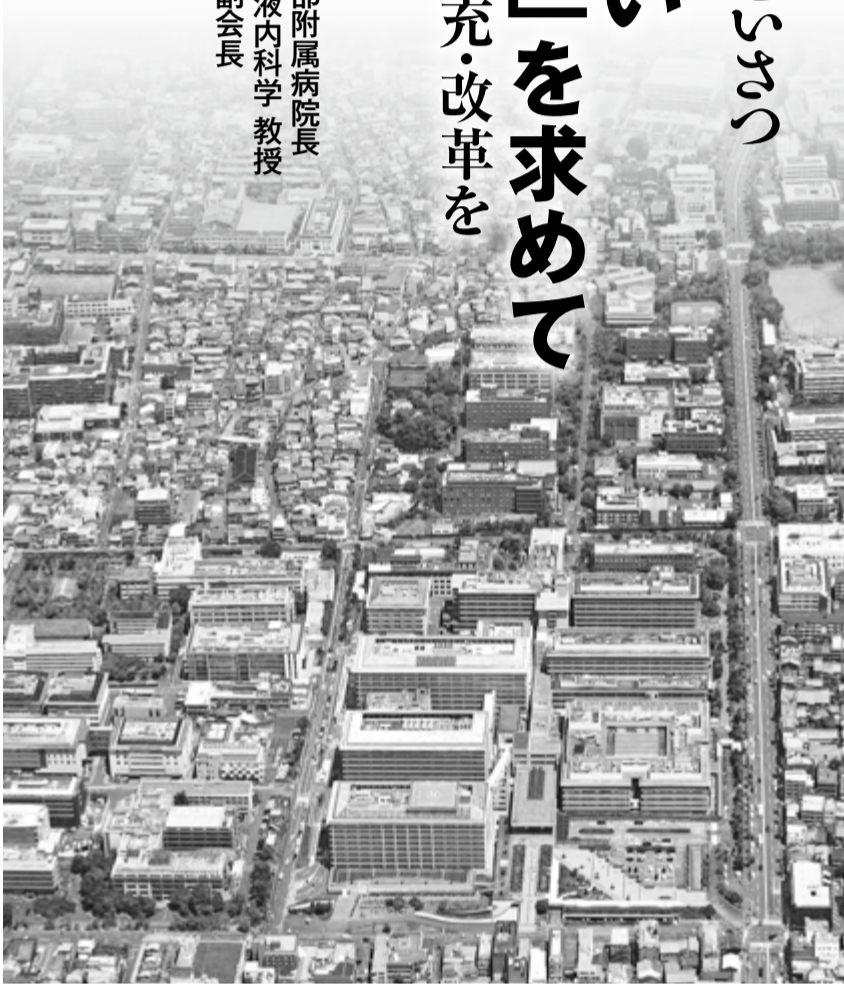
- ② 新任あいさつ
③ 校友会・KMSIFUNDだより
④ 支部だより「大阪」「東京」
⑤ 支部だより「京都」
⑥ 第78回 京都大学原爆災害総合研究調査班遭難者の慰霊／人事異動・会員計報

附属病院病院長 就任あいさつ

慣例に縛られない 「新しい病院の形」を求めて 施設整備促進と組織の拡充・改革を



京都大学医学部附属病院長 医学研究科 血液内科学 教授 芝蘭会理事・副会長 高折晃史



京都大学医学部附属病院の上空から (2019年8月撮影)

このたび、2023年4月1日付けで京都大学医学部附属病院病院長、並びに芝蘭会理事、副会長に就任いたしました高折晃史です。芝蘭会の皆様にご挨拶申し上げます。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

私は、稲垣暢也前々病院長、宮本享前病院長のもと、経営・施設担当の副病院長を6年間務めてまいりました。その間、京大病院は、大病院の使命である「診療・研究・教育」に関する3つの基本理念「患者中心の開かれた病院として、安全で質の高い医療を提供する」、「新しい医療の開発と実践を通して、社会に貢献する」、「専門家とし

ての責任と使命を自覚し、人間性豊かな医療人を育成する」をベースに、大きな発展を遂げました。就任のご挨拶を兼ねて、近年の京大病院の歩みを紹介させていただきますとともに、今後の抱負を述べさせていただきます。

具体的には、2015年の南病棟の開設を皮切りに、2019年には中病棟の開設とK-CONNECT(次世代医療・IPS細胞治療研究センター)の稼働、2021年には北病棟改修によるこども医療センター開設、西病棟からの精神科の移転集約化、2022年には救急のモデル病床設置と新型コロナウイルス感染症にも対応した結核病棟の増築を行いました。現在も中央診療棟の改修が進んできています。

このように、ハード面での改修・充実化が大きく進みました。これだけの施設が最新の設備である大病院は極めてまれであり、これにより、京大病院が目指す高度先進医療の開発と推進、高度急性期医療の充実はさらに大きく進んだといえます。

組織の拡充と改革で、一方、勿論、高度先進医療と高度急性期医療の推進には、ハード面だけではなく、ソフト面の充実も不可欠であり、これに関しても、組織の拡充・改革を進めています。

臨床研究中核拠点病院として、先端医療研究開発機構(iACT)の改組、K-CONNECTの設置により、IPS細胞を用いた臨床研究センター、小児集中治療センター、PFM(Peak Flow Management)センター、アレルギーセンター等を設置しました。

これらのセンターは、他では見られない京大病院独自の希少疾患へ対応可能なセンターであり、診療科横断的な診療により、患者さんにより簡便に適切な優しい医療を提供しています。特に、患者さんの外来診療から入院までを二元的に支援するPFMセンターの設立により、よりスムーズかつ柔軟な患者対応が可能となりました。



令和5年度 春の叙勲

◆ 瑞宝双光章

清水 幸夫 (昭38年卒) 元シミズ病院長

◆ 瑞宝中綬章

藤井 信吾 (昭46年卒) 元国立病院機構京都医療センター院長

乾 賢一 (教室会員 薬学部) 元京都薬科大学長

また、地元の先生方や医療機関との連携を今まで以上に密にし、強固に手を取り合っており、地域全体でしっかりと患者さんを支える安心の医療を提供します。

① これまで以上に高度先進医療・高度急性期医療を実践し、世界をリードする新たな医療開発を行うこと。

125周年の節目を 飛躍の好機に 京大病院は1989年(明治32年)12月に開設され、2024年に125周年を迎えます。これを機に、125周年記念事業を行いたいと考えております。是非、芝蘭会の先生方には、ご支援を頂ければ幸甚に存じます。

最後に、京大病院は、これからも社会の期待に応え、新たな医療の創出と地域医療への貢献を担いながら、大きく発展していきたくと考えております。芝蘭会会員の皆様には、これからも変わらぬご支援・ご指導を頂ければ幸いです。今後とも何卒よろしくお願ひ申し上げます。



# 新任あいさつ

## 神経科学をリードする 脳神経外科学へと その発展に尽くす



荒川芳輝

京都大学大学院医学研究科  
医学専攻脳病態生理学講座  
脳神経外科学 教授

2023年5月1日付で脳神経外科学・教授を拝命いたしました荒川芳輝です。この紙面をお借りして芝蘭会会員の皆様にご挨拶申し上げます。

脳神経外科は1941年に荒木千里先生が外科学第一講座の教授に就任され、診療と研究の課題を脳神経外科学に定められたことから開講となります。1965年から半田肇先生、1986年から菊池晴彦先生、1997年から橋本信夫先生、2009年から宮本享先生が教室を主宰され、大学教授を含めて多くの優秀な人材を育成し、国内外で神経科学の発展に大きく貢献されてきました。この伝統ある脳神経外科の6代目教授を拝命し、身が引き締まる思いであります。

私は、1997年に京都府立医科大学医学部を卒業し、京都大学脳神経外科に入局しました。京都大学医学部附属病院での6か月の研修後に、倉敷中央病院で脳血管障害を中心とした脳神経外科診療、加えて臨床研究の基礎を学ぶ機会を得ました。2000年に京都大学大学院に入学し、成宮周先生の研究室で神経再生を目指して神経細

胞骨格制御機構の研究に没頭しました。その後、脳腫瘍を専門領域とする機会をいただき、2005年に英国王立がん研究基金のロンドン研究所に留学し、がんウイルス療法法の開発を目指した種痘ウイルスの研究に従事しました。

今後の臨床研究は、良質な臨床試験の実施による治療開発とエビデンス創出が重要です。日本のがん臨床研究グループには、成人がんを対象にする日本臨床腫瘍研究グループ(JCOG: Japan Clinical Oncology Group)、小児がんを対象にする日本小児がん研究グループ(JCOG: Japan Children's Cancer Group)があります。私はこの両方の各脳腫瘍研究グループにおいて、研究代表を務め、全国の多施設に協力を得て第Ⅲ相試験を実施しています。さらに、各グループの事

務局を担当し、多くの臨床試験の支援も行っております。こうした臨床試験の実施を脳腫瘍以外の領域にも展開し、日本から多くのエビデンスを発信していきます。

京都大学脳神経外科がこれまで築いてきた診療・研究・教育の大きな伝統をさらに発展し、次世代のリーダーとなる人材を育成し、より優れた脳神経外科医療の提供に尽くしてまいります。芝蘭会の先生方におかれましては、ご指導ご鞭撻のほど、何卒宜しくお願い申し上げます。

## 医療の未来を切り拓く 医学教育の重責を胸に



片岡仁美

京都大学大学院医学研究科  
医学教育・国際化  
推進センター 教授

2023年4月1日付で医学教育・国際化推進センター教授を拝命いたしました片岡仁美と申します。芝蘭会会員の皆さまに御挨拶申し上げます。

私は1997年に岡山大学医学部医学科を卒業、腎臓疫内分分泌内科学に入局しました。内科研修修了後は同大学院において糖尿病性腎症の発症進展

に関する研究で2003年に学位取得し、同年に岡山大学病院に設立された総合診療内科に出向して以降、臨床・教育に20年間従事しました。

2007年に帰国後、文部科学省「医療人GP」に採択された女性医師のキャリア支援に取り組み、2008年には岡山大学病院卒後臨床研修センター副部長となり、研修プログラムの抜本的な改革に取り組みました。2010年に岡山県の寄附講座である地域医療人材育成講座の教授を拝命し、地域医療教育に従事したのち、2020年には岡山大学病院ダイバーシティ推進センター教授を拝命し、病院におけるダイバーシティ&インクルージョン推進と働き方改革などに取り組みました。

医学教育研究では、医学生、医師の患者への共感性(empathy)をテーマとしています。2015年からはプロフェッショナルナリズム教育に取り組み、学年を縦断するプログラムを構築してきました。

20年にわたる多様な経験をへて、このたび京都大学に着任しました。本学の自由の学风と伝統に感銘を受け、研究医(Divisican scientist)の養成や世界に羽ばたく人材育成というミッションをさらに実感し、本学の医学教育に携わる責任を深く受け止めています。

2022年度の医学教育モデル・コア・カリキュラムの改訂、2023年度からの共用試験OSCEの公的化など、医学教育をめぐる状況は近年大きく変化しており、さらに2024年4月に始まる「医師の働き方改革」の影響も予測されています。しかし、そのような変化の多い時代においても、重要なことは変わらないと思います。それは「教育の主役は学修者である」ということです。学生一人一人と向き合い、その素晴らしき資質が開花することをいかに支えることができるかを常に自身に問いかけながら真摯に取り組みたいと存じます。

国際化推進についても、コロナ禍で受けた影響を超えてさらなる発展を目指したいと思っております。2024年6月には日本医学教育評価機構(JACME)の国際基準を踏まえた医学教育分野別評価の2巡目の受審が予定されており、それを好機ととらえ、一層の医学教育の改善への契機にできたらと考えています。

当センターの活動はすべて多くの皆様の御理解と御協力があるからこそ成り立つものと存じます。芝蘭会会員の皆様には、どうぞ御指導、御鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

## 研究に裏付けられた 臨床と教育の実践



尾野 巨

京都大学大学院医学研究科  
循環器内科学 教授

2023年6月1日付で京都大学大学院医学研究科循環器内科学講座の教授を拝命致しました尾野巨です。この紙面をお借りして芝蘭会会員の皆様にご挨拶申し上げます。

当教室は、1909年5月に第3内科学講座として設置され、古くから循環器内科学を専門とする講座として、循環器学分野において多数の英才を輩出し、多くの業績を残して社会に貢献して参りました。伝統ある京都大学循環器内科の10代目の教授を拝命し、身が引き締まる思いです。

私は1991年に京都大学医学部を卒業し、京大病院内科研修ののち、兵庫県立尼崎病院循環器内科での勤務を経て、京都大学第3内科(循環器内科学)大学院に進みました。学位取得後は、循環器内科学のみならず、幅広い生命科学研究をしたいと考え、米国スク립ス研究所免疫部門に留学いたしました。

帰国後は国立循環器病研究センター、京都医療センターを経て、京都大学循環器内科で、助教、講師、准教授を務めて参りました。

京都大学では、非コードRNAの循環器疾患における役割を明らかにすることを目標に研究室を立ち上げ、そこから得られた知見を臨床応用に結びつけるためのトランスレーショナル研究

を推進して参りました。今後は、ヒトサンプルやiPS細胞、ビッグデータを積極的に利用して、基礎研究と臨床研究の垣根を低くするとともに、これまでに構築した産官学連携体制を基盤として研究を推進し、京都大学発の新規診断法・治療法の開発というイノベーションに繋げていきたいと考えています。

当科では、他科との連携により、「救急患者を断らない」を合言葉に、24時間の診療体制を実践しております。そして、従来の冠動脈形成術(PCI)や末梢血管形成術(PTA)、胸部大動脈へのステントグラフト内挿術だけでなく、不整脈に対するアブレーション治療、経カテーテル大動脈弁留置術

（TAVI）や経皮的僧帽弁カトリップ術（マイトラクリップ）、左心耳閉鎖術（ウォッチマン）、心房中隔欠損症、動脈管閉存症へのカテーテル治療などの最先端医療を行っています。今後も患者さんに最善の医療を提供できるように、新しい技術を積極的に導入していきます。

循環器疾患をお持ちの患者さんには、合併症を有する高齢者が多いため、全身の状態を確実に診断、治療できることが患者さんの生命予後を左右します。このことをふまえ、卒前卒後教育においては、まずは内科と救急のジェネラリスト・プライマリケア医としての素養が十分に備わるように指導します。そのうえで、豊富な症例数により得られた知識と経験を活かすこととはもちろん、その知識を常にアップデートできる循環器内科サスペンシャリストを育成します。さらには、学会・研究会で活発に討議し、今後の各疾患の診療の向上のために、国内外に情報発信できる医師、リサーチャー・サイエンティストを育てたいと思っております。

記念講堂（旧解剖学講堂）





# 京都大学医学部 校友会・教育研究支援基金

(KMS-FUND) だより

〒606-8501  
京都市左京区吉田近衛町  
京都大学医学研究科事務部  
TEL 075-753-4322  
FAX 075-752-1528  
Mail-Address:  
kyoto-kms-fund@office.  
med.kyoto-u.ac.jp

## 会長就任のご挨拶

# コロナ後の新時代に ふさわしい活動を



校友会会長  
近藤克昭

晩秋の候、校友会会員の皆様におかれましては、益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。

この度、令和5年4月より京都大学医学部校友会会長に就任致しました。校友会は、平成19年に当時の医学部生のご父兄有志を中心に発足した親睦団体（現在会員数約800名）です。初代会長の土井 起名 会長、後藤恒規元会長、新屋明美前会長に続き4代目の会長となります。

思い起こせば、新屋前会長からの会長就任の打診は、まさに青天の霹靂でありました。しかしながら、一人息子を入学させて頂いた京都大学医学部に対する感謝の念と、医学部教職員や校友会会員の皆様との交流を深める良い機会との思いから、それこそ清水の舞台から飛び降りる覚悟で、大役を引き受けさせて頂くことに致しました。

校友会の目的は「医学部の教育の充実と研究の発展、あわせて会員、学生、教職員の親睦を

はかること」と謳われています。約3年に及ぶ新型コロナウイルス感染症との戦いの中、校友会の活動も厳しく制限され、最近になってやっとトンネルの出口が見えてきたところでもあります。

私の任期中の使命は、コロナ後の新時代に即した校友会活動の在り方の模索にあるのではないかと考えております。幸いなことに、今年の春には校友会主催の卒業式・入学式祝賀会を、5月には主に1回生のご父兄を対象としたキャンパスツアーを、それぞれ規模縮小ながらも4年ぶりに開催することが出来ました。

これからは、会員、教職員事務局の皆様のご協力のもと一丸となって「普通の活動」を取り戻していきたいと思います。

また校友会は、現在の伊佐正 医学研究科長や歴代の医学研究科長との交流があります。さらには、大森孝一委員長をはじめとする京都大学医学部教育研究支援基金(KMS-FUND)の

皆様とも日頃から連携しており、様々な行事で共催の形をとらせて頂いております。今後も相互のさらなる良好な関係の構築に寄与したいと考えております。

校友会を通して会員の皆様と行動を共にするのも、何かの縁であります。私は栃木生まれの栃木育ちです。息子の京大入学を機に、未知なる世界に飛び込んでみたいとの思いから校友会委員として入会しました。今後は、校友会活動で京都を訪問する際に、コロナ禍で我慢していた京都観光もしっかり楽しみたいと思っております。

これまでの会長や会員の皆様が発案されました功績に恥じぬよう努力する所存ですので、何卒宜しくお願い申し上げます。



## 令和4年度 卒業生代表あいさつ

# 6年間の 2つの出会いを糧として それぞれの道に、今

宮脇里奈

私たちは、学生生活を経てそれぞれに多くの経験を積み、この日を迎えることができました。あつという間に過ぎたようで濃密であった京都大学医学部での6年間を通して、私は2つの「出会い」があったと考えます。

まず、お互いに支え合うことのできる仲間との出会いです。ここにいる私たち卒業生は、同じ医学部で学び続けながらも、一人ひとりが全く異なる大学生を送って来ました。一人ひとりの価値観を尊重し合い、切磋琢磨し続けられる同期の皆さんとここで出会えたことに誇りを持っています。これからは別の場所で、学生時代の思い出を糧にしながら高め合えるような関係性を続けていければ幸いです。

次に、京都大学医学部という環境での刺激的な学びとの出会いです。最先端の研究がなされているこの場所で、いち医学生として問津で関わることで、取り組みたいことがあると、いつでも先生方は私たちをあたたくかか入れてくださりました。医学部での教育を通して、自ら新しい課題を発見し、探究・挑戦することの面白さを、身を持って実感しました。私のこれからの人生の礎となった京都大学医学部に少しでも恩返しができるよう、卒業してからも精進して参ります。

今日こうして無事卒業の日を迎えることができたのは、いつも見守っていて下さった先生方、保護者の皆さまのお陰です。これからもその感謝を胸に、それぞれの道へと進んでいきます。

6年前とは少し違った表情でこの場所に再び立っていることを感慨深く、同時に名残惜しい気持ちも込み上げてきます。

最後になりますが、今後の京都大学医学部ならびに校友会がますます発展されることを願って、卒業生代表の挨拶とさせていただきます。



## 会員に大好評のキャンパスツアーを 4年ぶりに実施しました

校友会 親睦委員会  
辻久美子

校友会親睦委員会では、5月20日(土)に、コロナ禍の影響をうけ4年ぶりとなる、新入生の保護者を対象とした第8回キャンパスツアーを実施いたしました。

新緑の美しい朝、芝蘭会館にお集まりいただいた45名の参加者にサポートスタッフを加えて総勢60名で、基礎医学記念講堂を訪れました。明治35年に京都

所長の小泉昭夫名誉教授より「京都大学医学部の歴史の断片」と題して京大医学部の歴史や偉大な先輩方についてのご講演をしていただきました。

講演会のあとは3グループに分かれて、和やかに会話を楽しみつつ、構内の学生会館、医学プラザ、医学図書館や旧産婦人科病舎を見学しました。旧産婦人科病舎は病院構内初の近代建築で、歴史を感じる建物でした。

その後、メディカルイノベーションセンター(MIC棟)に集合して、センター長の成宮周京都大学名誉教授と副センター長の寺西豊先生に、お話を伺った後、卒業生の将来について、素晴らしい医学者として世界に羽ばたける道がここにはあると、力強くお話しくださいました。最後に皆様と記念撮影をして、午前中のツアーは終了となりました。

昨今の状況を鑑みて、資料の中に京大周辺のランチマップを同封し、昼食は個々でとっていただきました。午後は、明治末期から大正期にかけて西園寺公望の別邸として建てられた、非公開の重要文化財「清風荘」を見学しました。こちらは昭和19年に庭園と共に京都大学に寄贈され、現在は教育、迎賓、会議の場として使われています。管理事務所の奥田昭彦様より、たくさんの方の要人をおもてなされた時のエピソードなど、興味深いお話をいただきました。優雅な佇まいをみせる清風荘にて、心穏やかに静寂な時間を過ごすことが出来ました。参加者の皆様も仲良くお話しされている姿を見て、親睦委員会としてとても嬉しい一日となりました。

最後になりましたが、4年ぶりのキャンパスツアーを開催するにあたり、京大関係者等、多くの方々の多大なるご協力、お力添えを賜りましたこと、心より御礼申し上げます。ありがとうございました。



# 支部だより



## 大阪

### 事業継続計画(BCP)を策定するプロセスが地域医療の連携強化を促す

令和5年6月10日(土)、大阪市のホテルグランヴィア大阪にて、令和5年度芝蘭会大阪支部総会が開催されました。はじめに芝蘭会大阪支部会長の坂井義治先生より、「挨拶をいただいた後、野村明成先生の進行のもと、支部総会が行われました。会員報告・確認、役員の変更に関する報告、及び次回開催地と開催時期のお知らせがありました。」

続いて、京都大学大学院医学研究科初期診療・救急医学分野、京都大学防災研究所地域医療BCP連携研究分野教授の大鶴繁先生より、京大医学部に關する近況報告がありました。現在の医学研究科、医学部附属病院の運営体制、退任および新任教授のご紹介、建設中のがん免疫総合研究センター(Broad Myers Squibb)の紹介のほか、クリニカルアナトミーラボ(CAL)や医療DX教育研究センターの充実、YouTubeを活用した京大病院の疾患啓発動画配信、医学部教育研究支援基金KMS-FUNDの取り組みについてお話いただきました。

その後、「地域医療継続計画(BCP)策定のすゝめ—京大病院の高度急性期医療の現在地—」というタイトルで、大鶴先生による学術講演が行われました。

原点と京大病院の救急の充実化についてご紹介いただきました。高度先進医療と高度急性期医療の両立を図り、専門各科と救急部との緊密な連携、初期診療から集中治療までをチームでシームレスに行うこと、病院方針との連携の3点を大切にしております。また自由と自主性を重んじて人を大切にしたい、創造的で継続性に優れた京大らしい新しい救急を模索し、独自の・学際的・国際的な取り組みを目指しておられるとのことでした。

次に、減災・医療継続・早期復旧の実現を目指した医療防災研究についてお話いただきました。災害時の医療対応の基本コンセプトとなるのがCSCA TTTです。全ての災害に対する世界共通の体系的対応で、Command and Control(指揮と統制)・Safety(安全確保)・Communication(情報収集伝達)・Assessment(評価)・Thriage(トリアージ)・Treatment(治療)・Transport(搬送)のそれぞれの頭文字をとったものです。

大鶴先生はこのなかでもとくに医療者のみでは十分な対応が難しいSafety・Communicationに注目していらっしゃいます。熊本地震の際に多くの病院が病院避難という医療機関にとって最悪の事態に陥った原因について大鶴先生が調査したところ、おおよそ「建物安全性(耐震性)の不安」、「水(ライフライン)問題」の2つの原因があることが分かったそうです。被災地の医療を守るためには、医療機関がお互いに補完し合って役割分担することが重要であり、病院単位ではなく地域(医療圏)単位でのBCPを策定して備えることが必要であると強調されました。

Surge Capacity(医療供給力)を拡大して対応せねばなりません。なかでも病院建物の倒壊の危険性や医療機器の耐震性など、StructureとStaffの正確な判断は医療者には困難であり、今日の病院BCPにおいて必ずしも十分には検討されていません。これに関連して、医療機器の耐震性評価実験についてのお話も伺いました。医療機器のキャスターロックの条件を変えて実験したところ、対角にロックすると最も移動・転倒のリスクが低く、さらに機器の重心位置を低くする等の対策が有効だそうです。

一方で、2020年にコロナ禍で実施された、京大病院を模した免震棟と耐震棟を渡り廊下で繋いだ世界初の病院建物の実大振動台実験では、免震構造の建物ではほとんど被害を認めなかったそうです。現在、京都大学の防災研と附属病院とのコラボレーションにより、大阪北部地震の被害調査結果に基づく病院機能の脆弱性分析による将来の災害時の病院被害予測や、医療機関の地震計モニタリングによる自動観測・被害予測システムの開発等、災害時の減災や医療を継続させるための先進的な取り組みが行われています。

最後に、健康危機管理という概念についてお話いただきました。災害医療の最終目的は被災地の健康(Health)と暮らしの維持(健康危機管理)にあります。2021年にはWHOより「災害・健康危機管理の研究手法に関するWHOガイドライン」が発行され、今後は世界の災害研究手法の標準化が進み、防災政策につながるエビデンスの蓄積が期待されます。

コロナ禍を経て、医療圏単位での地域包括ケアシステムに防災や感染対策を組み込むようなセーフティネット、つまり平時から災害、さらには新興感染症のパンデミックまでをもカバー



する健康危機管理体制の構築が必要で、地域医療BCPの策定プロセス自体が地域の連携強化を促し、平時からの地域医療の向上に繋がるのではと、大鶴先生は考えておられるとのことでした。

講演終了後は写真撮影があり、私たち学生も参加させていただきました。懇親会では、芝蘭会

多くの先生方が意見交換されており、私たち学生にも話しかけてくださり、現在の大学の授業の様子などについてご質問いただきました。また、先生方の学生時代の大学の様子をお聞かせいただくなど、様々なお話を伺うことができ、大変良い経験となりました。

(文責・2回生 奥村圭一郎)

## 東京

### 健康科学フォーラムでは、麻酔科学と神経科学の二つの視点で脳機能を探究

2023年2月11日(土)、東京都千代田区神田の学芸会館にて、「2023年芝蘭会東京支部総会ならびに第21回京都大学健康科学フォーラム」が開催されました。

ちなみに、学芸会への入会は旧帝大の出身者に限られますが、学芸会館の利用にはそのような制限はないとのことでした。

第1部として支部総会がありました。全員で物故者に黙祷を捧げ、その後、芝蘭会東京支部長の高道也先生よりご挨拶がありました。「東京支部では恒例の総会とフォーラムについては、コロナ流行時も会員の協力と本部のお力添えにより、休むことなくオンラインで開催することができました」と謝意を表されました。今回、久しぶりの対面での開催ということで非常に嬉しく思っておられるようでした。

新しく役員(幹事等)になられた方々のご紹介がありました。東京支部には厚労省とのパイプを担うという重要な役割があることを知り、感心しました。大高支部長はつづいて次のように述べられました。「昨2022年度に年刊の会報『芝蘭の集い』第1号を発行しました。これには、年会費納入のお願いとともに、会員からの名簿作成に資する最新情報、及び新規会員のご紹介の依頼、その他、芝蘭会に関するニュース、新入会員紹介、留学だよりなども掲載されます。総会、フォーラムの充実に加え、この会報をベースとして、幹事会の開催など会員相互の輪を広げ、支部の質と量の向上を図りたいと考えています。」

その後、代表幹事の山村隆先生より2021年度の決算報告

が、また、監事の福井次矢先生からは同年度の監査報告がありました。

総会の最後に、新しく京都大学医学研究科長に就任された伊佐正先生より医学研究科・医学部の現況についての報告があり、人事や最近の京都大学医学部の話をして頂きました。

なかでも大学の教育、研究体制の改革への取り組みの話がメインでした。国際卓越研究大学に選ばれることが、京都大学の生き残るラスト・チャンスというところで、湊長博総長と岩井一宏プロボストが尽力されているということでした。国際競争力の向上のために選ばれてほしいと思われました。

第2部として、「第21回京都大学健康科学フォーラム」が執り行われました。講演1は、東京慈恵会医科大学麻酔科学 侵襲防御医学講座教授倉田二郎先生による「痛みと意識にせまる脳イメージング」(座長・山村隆先生)で、主なテーマは「麻酔によってなぜ意識がなくなるのか?」ということでした。

麻酔をしても視覚や聴覚は脳の一次感覚野には届きますが、それらが統合されなくなります。また、前頭連合野と頭頂連合野との間で情報交換が一方だけ遮断されます。そのため、各感覚の情報自体が脳に届いても感覚世界が形成されなくなり、意識がなくなるということでした。

伊佐先生による講演2は「脳の機能回復—私の来し方と京都大学の未来」というテーマの講演でした(座長・高道也先生)。脳や脊髄に損傷が起こった時にどのような回復の仕方をするのかというお話でした。

運動機能の回復には脊髄固有ニューロンが重要な役割を果たしているとのことでした。皮質脊髄路の損傷直後において、いきなり特定の神経回路に可塑性な変化が起こるのではなく、脳の広範な回路が脱抑制し、

## ご注意

最近、芝蘭会員の方々へ芝蘭会員または京大医学部事務職員の名前をかたって、個人情報(住所、電話番号等)を聞き出そうとする不審な問い合わせの電話があるということを会員の方からご連絡をいただいております。芝蘭会とは全く関係がございませんので、くれぐれもご注意くださいようお願いいたします。

なお、芝蘭会では会員の方から住所変更等のご連絡がない限り、事務局からはお問い合わせはいたしておりません。ご不審なことがありましたら、芝蘭会事務局までご連絡ください。







緊急的に両側の運動野を使って機能を代償する。その後しばらくして神経回路に可塑的な変化が起きて、損傷の反対側の一次運動野(M1)と両側の運動前野腹側部で機能が十分に回復されることよって、損傷した側のM1が必要なくなると考えられるとのことでした。どちらの講演も非常に興味深い内容でした。

講演会の後、学生会館5階の写真を撮る設備が整った部屋で記念写真の撮影がありました。

第3部は、立食パーティーという形で懇親会が執り行われました。大高先生のご挨拶と乾杯の音頭が始まり、私も挨拶をさせて頂きました。大高先生を

はじめとする様々な先生方が話しかけてくださり、現在の大学の様子や、新しくなったカリキュラムなどについて興味を持たれ、昔の大学の様子や大いに為になる話も多く聞くことができました。参加させて頂けて良かったです。とても和やかな雰囲気です。とでも和やかな雰囲気でお話することができました。こうして宴もたけなわり、懇親会は惜しまれながらも閉会となりました。

最後にはなりましたが、このようなお話をお聞きくださったことへの感謝の意をもって東京支部の報告を終わらせていただきます。

(文責・3回生 山本誠)

**京都**

**膠原病から始まった研究者人生を歩みつづ、プロボスト理事として「京大らしさ」を問う日々**

令和5年7月2日(日)、芝蘭会館稲盛ホールにて、芝蘭会京都支部総会が開催されました。

はじめに、支部長の森洋一先生による挨拶の後、物故会員への黙祷が行われ、その後、野口雅滋先生の進行のもと、庶務・会計報告、運営報告、芝蘭会本部報告、さらに京都大学大学院医学研究科消化器内科学分野の妹尾浩教授から、京大病院の近況について報告がありました。

引き続き、京都大学プロボスト理事・副学長、京都大学大学院医学研究科細胞機能制御学教授の岩井一宏先生の講演「膠原病から始まった研究者人生を経て京都大学に還元したいこと」がありました。

講演では、まず最初に、岩井教授が研究者になられた経緯が紹介されました。先生は当初は臨床医を目指し、全身性エリテマトーデス(SLE)を中心にリウマチ・膠原病の診療・研究に従事しておられました。しかし、大学院修了後の米国留学を契機に、故あって研究テーマを免疫から生化学・細胞生物学に変更することになったそうです。留学時の研究テーマが免疫とはほとんど関係なかったこと、また、大学院時代も基礎系の研究に従事していたことや研究者としての人生に大きな違和感があったことから、基礎研究者としての人生を歩むことに舵を切られたそうです。

留学先で手掛けた研究は細胞の鉄代謝・動態調節の研究で、その過程で鉄代謝の調節タンパク質が鉄依存的に分解されることを発見しました。その発見がきっかけとなって、特定のタンパク質を状況に応じて分解して

くことができるユビキチン修飾系の研究に着手されました。ユビキチンはポリマーであるユビキチン鎖としてタンパク質を修飾し、そのユビキチン鎖がマークとなって、タンパク質分解酵素複合体であるプロテアソームがユビキチン修飾されたタンパク質を分解します。このユビキチン依存性タンパク質分解系は細胞の低酸素応答をはじめとして多くの重要な細胞機能の制御系であることが判明し、またプロテアソームの阻害剤が多発性骨髄腫の治療薬として臨床に供されることなどもあり、岩井教授の友人である発見者たちには2004年のノーベル化学賞が授与されています。ちなみに、ユビキチン系は発見者たちが生化学の基本的な疑問に基づいて研究を推進したことで発見されています。

しかし現在では、ユビキチン修飾系は分解の範疇には収まらず、多様な様式でタンパク質の機能を制御する可逆的な修飾系として知られており、細胞内には多彩なユビキチン鎖が存在している、その種類によってタンパク質の制御様式が異なることが示唆されています。

岩井教授は、当時支配的であったユビキチン鎖を生成機構の仮説が酵素的概念を逸脱していることに疑問を持ち、ユビキチン鎖生成機構の解明に取り組まれたそうです。

その過程で全く新しいユビキチン鎖である「直鎖状ユビキチン鎖」を発見されました。そしてその機能を解析していく過程で、その生成不全が自己炎症性疾患を惹起することを明らかにしました。また、直鎖状ユビキチン鎖の生成を亢進させる方法を開発し、その方法を用いて作出したマウスがSLEを発症すること、ヒトでも直鎖状ユビキチン鎖の生成を亢進させる遺伝子の多型がSLEの疾患感受性遺伝子多型であることが

示されました。

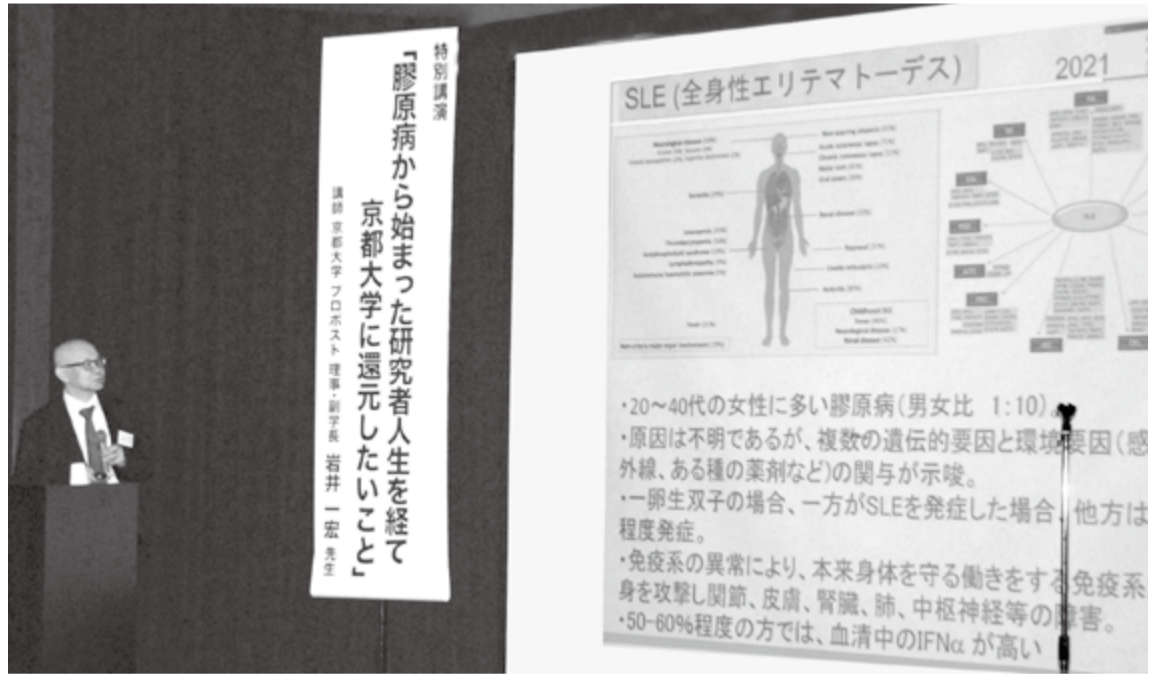
岩井教授はリウマチ・膠原病の臨床医としてキャリアをスタートされました。「遠回りをしたかもしれないが、基礎研究者として基本的な命題に対峙することを通して、キャリアを始めた頃に目標にしていた膠原病の病因の一端を解明できたことは本当に幸運である」と語っておられた点が印象的でした。

岩井教授はまた、2022年9月まで、医学研究科の副研究科長、研究科長を務められました。その間は、人材育成に力を入れ、自ら考え自ら行動できるオリジナリティーのある学生を育成できるシステムの構築に尽力されました。医学科では特色入試や飛び級制度を導入したり、

カリキュラム改革を断行されました。さらに、人間健康科学科の機構改革にも参画されました。講演の最後に、現在は理事として京都大学の運営を担われ、自由の学風をもつ京大らしさを維持しながら、研究者にとって研究しやすい環境の確立を目指しておられることも紹介されました。

こうして総会が終了した後、懇親会が開催されました。まだ医学の勉強を始めて間もない私ですが、学術講演はともないうちに、学術講演はともなうに、このような素晴らしい会にお招きいただいたことに最大限の感謝の意をもって京都支部総会の報告を終わらせて頂きます。

(文責・2回生 奥村圭一郎)



岩井一宏先生による講演



隣接するシラン・カフェで4年ぶりに懇親会を開催。挨拶は伊佐 正芝蘭会会長

**芝蘭会費納入は 自動振替で**

平成17年度より芝蘭会費の納入方法として、「銀行口座等からの自動引き落とし」を採用させていただいております。会費納入のお手間が大幅に省かれ、また、会費の二重払いの防止にもつながります。

ぜひ、ご利用いただきたくお願い申し上げます。手続きについて芝蘭会事務局までお問い合わせください。手続き等については、

**芝蘭会事務局**

TEL 075-751-2713  
FAX 075-752-4015



第78回 京都大学原爆災害 総合研究調査班 遭難者の慰霊

令和5年9月16日(土)に、広島県廿日市市宮浜温泉において、第78回京都大学原爆災害総合研究調査班遭難者の慰霊を自由参拝にて執り行いました。

当日はご遺族、廿日市市長、同市議会議長、同市役所関係者、廿日市市大野支所長、広島市関係者、広島京大関係者、芝蘭会広島支部関係者、京都大学からは、花川副研究科長、現職教授のほか、総務部総務課、芝蘭会事務局等45名の参拝者があり、無事慰霊を執り行うことができました。

京都大学原爆災害総合研究調査班

京都大学原爆災害総合研究調査班は、1945(昭和20)年8月6日に原子爆弾が投下された広島にいち早く赴き、被爆者の診療及び調査研究を行っていましたが、同年9月17日に西日本を襲った枕崎台風により、滞在先の大野陸軍病院が山津波に見舞われました。この時、理学部医学部の教官と学生ら約50人で編成された調査班の班員のうち、11名が多くの患者とともに犠牲となりました。



花川副研究科長



松本廿日市市長

75回・2022(令和4)年版 「芝蘭会会員名簿」

ご希望の方は事務局までご連絡ください (TEL: 075-751-2713)

- 会員名簿：A4判、813頁
●発行日：2022(令和4)年11月
●会員頒布代：1部5,500円(消費税を含む)
※但し、会費納入者に限る。
その他は11,000円(税込)
●送料：900円

Table of membership changes including names, positions, and previous roles. Includes entries for R5.4.3, R5.5.1, R5.5.1, R5.5.1, R5.5.1, R5.6.1, R5.6.1, R5.6.1, R5.6.1, R5.6.1, R5.6.30, R5.6.30, R5.7.1, R5.7.1, R5.7.1, R5.7.1, R5.7.1, R5.8.1, R5.8.1, R5.8.1, R5.8.1, R5.8.1, R5.8.1, R5.8.1, R5.8.1, R5.8.1, R5.8.1, R5.8.1.

Table of membership changes including names, positions, and previous roles. Includes entries for R5.9.30, R5.9.30, R5.9.30, R5.10.1, R5.10.1, R5.10.1, R5.10.1, R5.10.1, R5.10.1, R5.10.1, R5.10.1, R5.10.1, R5.10.1, R5.10.1, R5.10.1, R5.10.1.

人事異動

Advertisement for Shiran Cafe at the Shiran Club Annex. Includes text: 「SHIRAN CAFE」をご利用ください, シランカフェ, なつかしいキャンパスのそばで、同窓会、懇親会、忘年会はいかがですか、メニューなど詳細はこちら

謹んでご冥福をお祈りいたします

Table of deceased members with columns for name, year of death, and date of death. Includes names like 宮村元親, 西山広芳, 橋田悦, etc.

日付はご逝去日

Table of deceased members with columns for name, year of death, and date of death. Includes names like 酒井章, 日比光雄, 田原明夫, etc.

訂正とお詫び

「芝蘭会報」第212号(前号)3頁に掲載の「退任あいさつ」戸井雅和氏(東京都立病院機構東京都立駒込病院院長)の記事に誤りがありました。会員ならびに関係者の皆様には、大変ご迷惑をおかけいたしました。謹んでお詫びするとともに、次のとおり訂正いたします。

3頁「退任あいさつ」戸井雅和氏 本文 冒頭1行目 誤：「2003年」 → 正：「2023年」

会員計報

事務局から 平成17年4月からの「個人情報保護法」の全面施行により、個人情報取り扱いに厳しい制約が課せられました。つきましては、会員の連絡先等のお問い合わせは、必要理由等を明記の上、郵便またはFAXにより事務局までご送付ください。電話でのお問い合わせにはお答え致しかねますので、ご了承ください。 FAX 075-751-4015

原稿募集

芝蘭会報は、会員の皆様の情報交換・意見発表の場であり、支店活動、クラス会、会員の著書の紹介(自薦・他薦)及び医学・医療等に関するご意見を寄稿ください。なお、送付先は FAX(075-752-4015) または E-mail (info@shirankai.or.jp) へお願い致します。また、原稿の採用及び掲載時期については、編集委員会で決めてさせていただきます。

芝蘭会報編集委員会

- 芝蘭会報編集委員会 委員長 高折見史 委員 中村保幸、吉岡秀幸、清川岳彦、園部誠、松村由美、甲斐亜沙子、諫田淳也 芝蘭会雑誌部 顧問 高折見史 部長 高折見史 (6回生) 奥野芳樹、青木ちひろ、福井貞孝 (5回生) 三宅大河、小林空暉、小澤向陽、野洲春菜 (4回生) 大島輝 (3回生) 福田大智、反田武志、山本誠 (2回生) 奥村圭一郎、田中春輝、林東吾、木田雄大、周新陽 芝蘭会事務局 事務局長 山田均 管理課長 森勝二 総務課 秋山和美 制作協力 京都通信社 デザイン 納富進